男のいう伝説の伝承の第一段階として、すなわち、ここで述べた英雄達の一族と直接、あるいは間接的に関わって、「我が一族」「我が島」の話として伝えられているということです。そこには、伝承の第二段階、すなわちその伝説と直接関わりの無い人々の間で伝えられている伝説と自ずから違いがあります。そして、これらの英雄伝説は、それを語り伝える集団に所属する人々の心の絆ともなり、また心の支えとしての役割を果しており、それらの人々の伝承を取り囲むように、英雄には直接関わりのない、例えば他の門中、他の一門の人々のこれらの英雄に関する伝承を成立させ、沖縄の人々の様々な共感の基礎を形成しているのです。

琉球王国と言語

高橋俊三

高橋俊三・たかはしとしぞう
一九四二（昭和一七）年五月生まれ。広島大学大学院文学研究科修士課程修了。沖縄国際大学文学部教授、現在同大学文学部長。専門は国語学（琉球方言）。著書に『おもろさうしの動詞の研究』（武蔵野書院）、『おもろさうしの国語学的研究』（武蔵野書院）など。

一　『おもろさうし』以前の言語

本土方言と琉球方言が分岐した年代についてですが、服部四郎は比較言語学と言語年代学（基礎語彙統計学）の方法によって、二、三世紀ないし、おそくとも六、七世紀ごろまでの間と推測しています。[注1] また、考古学・歴史学などの隣接科学の成果を勘案して、現在の琉球諸方言の体系・構造を正確づける「くまそ連合国家」からの大移住として、二つ考えています。一つは、「くまそ」が邪馬台国を滅ぼした最盛期で、三世紀の末で、この場合には領土拡張のための征服的侵入です。いま一つは、大和連合国家あるいは大和朝廷による「くまそ」の征服時で、四世紀の初めで、この場合には亡命的移住です。また、この両移住が重なったことも十分ありえますが、ともかく、このころ移住した、日本祖語の子孫にあたる言語を話す新しい移住民によって、それ以前に住んでいた人々が使っていた言語の多くは消されて、言語の取り換えが起こったと述べています。[注2]

こうして、移住した人々は、所々で以前に住んでいた人々の単語、特に本土ではない物の名など、例えば、アマン（やどかり）、ガジマル（榕樹）といった動植物名やカニク（砂地）、イフ（堆積地）といった地名などを取り入れたことでしょう。そのようにして成立した言語が琉球祖語ということになります。具体的にどのような言語かは、文献資料がないので、比較言語学的方法により推

測せざるをえません。また、正確なことを言うことができるほどには、研究が進んでいません。その後、琉球地域の独自の文化の発展と、本土の言語が複雑に影響しあって、『おもろさうし』記書かれているような言語になったのです。

二　『おもろさうし』時代の言語

一六世紀以降になると、ややまとまった琉球方言の文献が残っています。

「語音翻訳」（一五〇一年、成希顔著）は、『海東諸国紀』（申叔舟著）の末尾に付録として付け加えられたもので、琉球方言の会話が数例と単語が約一五〇例、朝鮮文字のハングル（諺文）で記載されています。(注3)

『琉球国碑文記』は、琉球国内の各地にある金石碑文を、数回にわたり追加編集されたものです。第一回は、一八世紀初期首里王府が編集されたと言われています。(注4)これにより、第二次大戦で破壊され消失した石碑の内容を知ることができます。一五三〇年頃までの碑文は、おおよそ琉球方言で書かれたものが多く、言語資料として役に立ちます。

陳侃の著わした『使琉球録』（一五三四年）は、第二尚氏第四代尚清王の冊封正使として琉球に渡来した時の記録ですが、この末尾に「夷語」という項目を設け、琉球語約三八四語を、漢字で記録しています。(注5)中国の資料としては、他に『琉球館訳語』（一六世紀頃）があります。(注6)

『おもろさうし』は、沖縄で最も古い祭式歌謡集で、二二巻、一五五四首よりなっています。一五三一年（尚清王時代）と一六一三年（第七代尚寧王時代）と一六二三年（第八代尚豊王時代）の三回にわたって編集され、ほとんど平仮名で書かれています。一七〇九年一一月に原本は焼失して、翌年七月再編されました。そのさい、どのような再編がなされたのか、多くの疑問を残していますが、ともかく「尚家本」と「安仁屋本」の二本が作成され、後者には注とくぎり点が付されました。なお、前者には若干の錯簡と欠落があります。また後者は第二次大戦の時、焼失しましたが、その前に筆写されたものや、校合されたものがあります。(注7)

オモロ（祭式歌謡の一種）の多くは女が謡ったものですが、男が謡ったものもあります。採録されたオモロは沖縄地方のものが大部分で、奄美地方のものも少しあります。先島地方のことも謡われていますが、現地で謡われたオモロはありません。『おもろさうし』に書かれた言語の地域差は非常に少ないようで、具体的には疑問の残る数例しか指摘されていません。また、巻により編集年代も違うのですが、その言語の質的な差もみあたらないようです。「祭式歌謡共通語」といったものがあったのでしょう。また、歌謡集という性格からして、記録された時よりも古い言語を反映していると考えられます。以上のように『おもろさうし』は、古さ、質、量においてたいへん重要な価値をもっています。

『おもろさうし』の言語と、「語音翻訳」や『琉球国碑文記』や『使琉球録』に書かれた言語は、

基本的には同じと言ってよいでしょう。以下『おもろさうし』をもとに、その言語の特徴を述べていきます。[注8]

(一) 音韻

母音

『おもろさうし』の時代に、短母音は基本的にはa・i・ï・u・oの五個であったと考えられます。

① オ段の仮名とウ段の仮名を正しく書き分けようとしていますが、次の例のように、混用した例が一五〇語近くもあります。

[ア行] うゑて……おゑて（植えて）
[カ行] みしやく……みしやこ（御杓）
[カ行拗音] なさいきよ……なさいきゆ（父人）
[サ行拗音] みしよ……みしゆ（御衣）
[ナ行] のばまし……ぬばまし（延ばまし）
[ハ行] きみほこり……きみふくり（君誇り）
[マ行] きも……きむ（肝）
[ヤ行] よかる……ゆかる（良かる）
[ラ行] そろて……そるて（揃て）

このように混用した単語においては、上の表記（例えば「うゑて」）のようにも聞こえ、下の表記（例えば「おゑて」）のようにも聞こえるということですし、どちらの発音もしているということだと考えられます。今日の言葉で例えると、「しあわせ」と「しやわせ」、「しち（七）」と「ひち」、「むつかしい」と「むずかしい」のような状況であったのでしょう。すなわち、多くの語において、oはuに変わっていたようです。しかし、『おもろさうし』では連母音auがo:に変化していないことや、奄美大島方言の母音oのuへの変化状況[注9]からすると、すべてのoがuには変わっていなかったと考えられます。語によっては、oで発音しなければならないということがあったと考えられます。

② エ段の仮名とイ段の仮名は、基本的には正しく書き分けられています。例えば、「せざ」（兄。首里方言ではシジャという）と「しま」（島。首里方言でもシマという）や、「ね」（根。首里方言ではニーという）と「にし」（北。首里方言でもニシという）というように書き分けています。しかし、「い・ゐ・ゑ」は混用しています。また、語中・語尾ではさらに「ひ・へ」も混用しています。（なお、「え」の仮名は全く使われていません。）

○ゑそこ・いそこ（良き船）　○こゑ・こへ・こい（声）

③ ウ段の仮名は原則として、正しく書き分けられていますが、「す」は若干「ぜ」と混用して

います。

○よせぎいちゐて……よすぎいちへて（濯ぎ出して）

○よゝすとみ……よゝせとみ（船名「世寄せ富」）

したがって、「す」「ず」「つ」「づ」以外では、ウ段の母音は、変化なくu（正確にはɯ）であったと考えられます。

④ 「す」「ず」「つ」「づ」、およびエ段の母音は、「す」と「せ」の混用や、エ段の仮名表記の状況などを考え合わせると、ɨであったと考えられます。

⑤ 連続した母音は、一方が母音脱落することにより、その連続を避けることが多い。特に、aiやauやouのように、狭い母音が後にくる時は、後の母音が脱落する傾向があります（本土でも奈良時代には、このような現象がありました）。

○しりぎや（尻がい。sirigai のiが脱落したもの）

○ひやし（拍子。hjausi のuが脱落したもの）

○おもな（思うな。omouna のuが脱落したもの）

子音

① 語中・語尾のハ行音は、ア行音で書かれた例があります。琉球祖語では［p］であったのが、その唇を閉じる力が弱まって、［ɸ］や［w］になり、さらには脱落したと推測できます。

○といろ（十尋。「とひろ」の「ひ」が「い」に変化している）

○おうね（御船。「おふね」の「ふ」が「う」に変化している）

② 「じ」と「ぢ」の区別や、「ず」と「づ」の区別が失われています。「ぢ」「づ」は、古くはおのおの［di］、［du］と発音されていたのですが、ジ、ズと発音されるようになって、区別がなくなったのです。

○しまはじめ……しまはぢめ（島始め）　○ずれ…づれ（いずれ）

③ 子音の前のi母音の影響による口蓋化の現象が盛んです。これは沖縄方言に顕著にあらわれた変化です。おそらくiの発音をするとき、呼気を強くして舌を口蓋の方に近づけて（口蓋と舌の間を狭めて）発音する傾向が強かったためでしょう。ともかく、この口蓋化の現象で、拗音がたくさん存在するようになります。

○いみや（今。imaのiの影響でマがミャになっている）

④ 破擦音の口蓋化現象（キャ・ギャがチャ・ヂャになる現象）は生じています。［kja］、［gja］のjがiよりも舌を口蓋のほうに近づける発音だったからでしょう。

○ちよわる（来給う。「きよわる」がチョワルと変化している）

⑤ 撥音（はねる音ン）が存在しています。

○はんた（崖）　○なんか（七日）

⑥ 促音（つまる音ッ）は、『おもろさうし』では表記されていません。存在したかと思われま

d か、首都圏ではみなされなかったようです。促音に発音してもしなくても、間違った発音だとされなかったようです。

○もちゐ（持って。首里方言ではムッチ）　○みきや（三日。首里方言ではミッチャ）

⑦ ダ行音がラ行音に変化した例は二、三例あるのみです。

○ここら（たくさん。『万葉集』の「ここだ」に対応）　○る（係助詞「ど」）

⑧ 語尾のシが脱落することがまれにあります。

○むか（昔。「むかし」の「し」が脱落している）

○ももと（百年。「ももとし」の「し」が脱落している）

(二) 文法

活用

沖縄方言の動詞の活用は、たいへん変化していて、本土の活用や活用形の名を沖縄方言に用いるのは適当でないのですが、以下、便宜的に、本土のそれに対応するものというような意味あいで使います。

【動詞】

(1) 四段活用は、「連用形＋て」（以下接続形という）の音便の生じ方によって、六種に分かれます。[10]

① 「て」が「ちへ」と口蓋化するのみで、連用形の語尾「ち」の多くは脱落しない型です。これにはタ行四段動詞（例「立つ」）などが属します。（「動詞活用表」参照。以下同様）

② 「て」が「ちへ」と口蓋化するとともに、連用形の語尾「き」あるいは「し」の変化した「い」が完全に脱落している型です。これにはカ行四段動詞（例「書く」）やサ行四段動詞（例「押す」）が属します。

③ 「で」が「ぢへ」と口蓋化するとともに、連用形の語尾「ぎ」の変化した「い」が完全に脱落している型です。これにはガ行四段動詞（例「漕ぐ」）が属します。

○こぢへ　きよる　きよらや（漕いで来ているのが美しい）〈一〇の三五〉

④ 「て」が口蓋化せず、連用形の語尾「ひ・る」の変化した「う」が脱落する型です。これには3音節以上のハ行四段動詞（例「願う」）が属します。ただし、二音節のハ行四段動詞（例「会う」）は「う」が脱落しません。

○まはへ　こうて　はりやべに（真南風を乞うて走らせよ）〈一三の五〉

⑤ 「て」が口蓋化せず、連用形の語尾「り」の変化した「っ」が脱落している型です。これにはラ行四段動詞（例「取る」）が属します。

○まきん　とて　みおやせ（真絹を取って、奉れ）〈一三の一一六〉

⑥「て」が「で」と濁音化するとともに、連用形の語尾「み」あるいは「び」の変化した「ん」が脱落している型です。これにはマ行四段動詞（例「読む」）やバ行四段動詞（例「飛ぶ」）などが属します。

(2) 上一段活用は、ほぼラ行四段活用化しています。具体的にみると、まず未然形に「ら」が付いています。

○きこへいけぐすく　みらんすが　ほるび（有名なイケグスク《拝所名》を見ない者が滅び）〈一七の一三〉

連用形は、「り」の付いていない例もありますが、付いている例もあります。「り」が付いている語は、完全にラ行四段活用になっていることになります。

○とり　まわさだな　いりおとちへ（鳥を舞わさずに射落とした）〈一四の六三〉

命令形は活用語尾が「れ」になっています。

○おれ　みれ（それを見なさい）〈七の三五〉

接続形は、語幹末尾のiの影響で、「て」が口蓋化して「ちへ」となっています。

○ともゝその　あすび　みちへど　うらやみよる（拾百人の神遊びを見て羨んでいる）〈八の五七〉

(3) 下一段活用は、「蹴る」の連用形の古い形の「け」と新しい形の「けり」の例しかないので、はっきりしませんが、他の活用から推測すると、活用表のようになります。

○あさつゆは　けりあげて（朝露は蹴りあげて）〈一三の八八〉

(4) 上二段活用は、確かな例が出てこないので不明です。本土方言で上二段活用をする「満ちる」「降りる」は、『おもろさうし』では「満てる」「降れる」のように下二段に活用しています。

○きこゑ大きみぎや　おれて　あすびよわれば（聞得大君が降りて遊び給えば）〈一の一〉

(5) 下二段活用は、まず一段活用化して、さらにラ行四段活用しつつあります。具体的にみると、未然形に「ら」が付いた例と、付いてない古い形の例があります。

○やまといくさ　よせらや（大和の軍が寄せるであろう）〈一〇の三四〉

連用形は変化していませんが、命令形は語末の「よ」が「れ」になっています。

○わが　うら　よせれ（我が浦に寄せよ）〈一三の一二八〉

接続形は連用形に「て」がそのまま付いています。

○しまよ　ゆせて　みおやせ（島を寄せて《王に》奉れ）〈八の六〇〉

(6) カ行変格活用は、終止形が連体形と同じになっています。命令形は「こう」ですが、これは、沖縄方言では一音節語は長母音であるので、その長音を表記していると考えられます。

○まへにかち　よて　こう（前に寄って来い）〈一一の一六〉

接続形は「て」が「き」のi母音の影響で「ちへ」と変化しています。

○さしきから　もだいきよ　きちゑ（佐敷からモダイキョ《人名》が来て）〈一九の七〉

サ行変格活用は、未然形に「ら」の付いた形と、付いていない古い形の例があります。接続形

も口蓋化した古い形と口蓋化していない新しい形があります。命令形の例は見当りませんが、「せれ」であったでしょうか。

○いき　せらに（息をしよう）〈一五の七四〉

(8) ラ行変格活用は、終止形に、元来の終止形と連体形と同じ形になった例とがあります。接続形は、「り」が脱落しています。

○あよなめさ　げに　あて（じつに無礼であって）〈三の九〉

（表）　動詞の活用表

（　）で囲まれたものは、ある音環境で脱落することがある。

	語幹	未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段①	立	た	ち	ちちへ ちへ	つ	つ	つ	つ
四段②	書	か	き	ちへ	く	く	け	け
四段③	漕	が	ぎ	ぢへ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段④	願	わ	（ゐ）	（う）て	う	を	ゑ	ゑ
四段⑤	取	ら	（り）	て	る	る	れ	れ
四段⑥	読	ま	み	で	む	め	め	め
上一	（見）	みら	みみり	みちへ	みる	みる	みれ	みれ
下一	（蹴）	けら	けけり	けて	ける	ける	けれ	けれ
下二	寄	せ せら	せ	せて	せる	せる	せれ	せれ
カ変	（来）	こう	き	きちへ	くる	くる	くれ	こう
ラ変	有	ら	（り）	て	り る	る	れ	れ
サ変	（為）	せ せら	し	して しちへ	する	する	すれ	せれ？

活用形

(1) 未然形

① 単独で文節を作り、推量・意志・勧誘の意を表わしています。

○あんは　かみ　てづら（私は神を祈ろう）〈二の四五〉

② 単独で文節をつくり、「とき・かず・ひと」などの名詞を修飾しています。

○あけろ　とし　たゝ　かず　きみ〳〵　てづて　ふさよわれ（新年がやってくるであろうごとに、神女様を祈って栄えませ）〈一二の七四〉

③ 助動詞「ず」「む」「れる」「まし」「だな」「な」などが付きます。

④ 助詞「に」「がめ（ぎやめ）」「ぎやで」「ば」「しよ」、「い」などが付きます。

(2) 連用形

ハ行・ラ行四段動詞やラ変動詞の連用形においては、次に「居る」「有る」「おわる」などの、母音あるいは半母音で始まる語が付くと、語尾の「ひ」「り」などが脱落します。

① 用言を修飾したり、文を中止したりします。

○こねり　なよる　かなしけさ（踊り舞うことの愛らしいことよ）〈一二の一九〉

② 同じ語を重ねて、動作の繰り返しを表わしています。

○ひる　なれば　きも　かよい　かよて（昼になると心がいつも通って）〈一四の一五〉

③ 補助動詞「居る（よる）」が付いて、持続・進行を表わしています。

○なま　ふきよる　にしや（今吹いている北風は）〈一一の六三〉

④ 補助動詞「有る」が付いて、完了を表わしていたかと推測されますが、『おもろさうし』では、連用形の「有り（やり）」が付いて、動作の継起などを表わしています。共通語の接続助詞「て」にちかい、用法になっています。

○げす　ま人　すだしやり　ちよわれ（下司、真人を生み育てましませ）〈六の一五〉

⑤ 補助動詞「おわる」（いらっしゃるの意）が付き、尊敬の意味を表わしています。四段動詞・上一段動詞・カ行変格動詞・サ行変格動詞に接続した場合は「よわる」となり、下二段動詞に接続した場合は「わる」となります。(注11)

○おぎやかもいしよ　てるかはが　てりよわるやに　ちよわれ（尚真王様こそ太陽が照りなさるようにいらっしゃる）〈一二の七〉

○きこゑ大きみぎや　かいなでわる　たゝみきよ（聞得大君が撫で慈しみなさる貴人）〈一の一三〉

⑥ 補助助動詞「やべる」がついて丁寧を表わしています。「やべる」は本土古語の「侍（はべ）る」が移入したものと言われています。独立して使われた例がないので、助動詞というのが適当かもしれません。

○ゑぞにやの　うちや　あまへやべら　ほこりやべら（英祖様の内は歓喜していることでしょう）〈五の七八〉

⑦ 助動詞「ぼしや」（願望）、「つ」（完了）、「き」（過去）や、助詞「が」（動作の目的・累増）、「に」（動作の目的）、「なげな」（動作の同時進行）などが付きます。

(3) 接続形

動詞の連用形＋接続助詞「て」の形を接続形と呼んでいます。下二段動詞を除いて、ほとんどの動詞において音変化（音便）が生じています（活用表参照）。

① ある動作をし、続いて他の動作をすることを表わしています。

○うみ　とらちへ　わが　うら　よせれ（海を穏やかにして我が浦に寄せよ）〈一三の一二八〉

② 単独で、あるいは「か」がついて、文を終止し、過去を表わしています。

○なおう　こので　おわちへか（何を企画していらっしゃったのか）〈一三の三九〉

③ 補助動詞「置く」がつき、動作結果の保存を表わしています。

○なでゝ　おちやる　こまつ（撫でて大切にしていた小松）〈一三の一三三〉

④ 補助動詞「ちよわる」がつき、敬体の持続を表わしています。

○あんしおそいしよ　せぢ　まさて　ちよわれ（王こそ霊力が勝っていらっしゃる）〈三の一三〉

⑤ 助詞「から」がつき、ある動作が終わり、それと関連して次の動作が起こることを表わしています。

○きよらけ　おゑてから　しまでん　くにでん　みおやせ（美しい木を植えてから島でも国でも差し上げよ）〈二二の四六〉

(4) 終止形

『おもろさうし』では、原則として終止形と連体形は同じ形になっています。

① そのままで、文を終止します。

○やまとの　かまくらに　たとゑる（大和の鎌倉に喩える）〈一六の一八〉

② 終止形＋「む」で婉曲的な表現で余韻を残して文を終止します。用途はごくまれです。今日の沖縄方言の終止形にあたる形でしょう。

○しげ〳〵と　おりさちへ　けおより　あいいてるむ（何度も折り差して今日より相照る）〈一〇の二一〉

③ 助動詞「まじ」（打消の推量・意志）や、助詞「な」（禁止）が付きます。

(5) 連体形

① 連体修飾の働きをします。

○たま　こがね　もちみちへる　ぐすく（玉や黄金が満ちている城）〈五の六〉

② 準体法（体言に準じて用いる用法）の働きをします。

○げらへきよらもりに　くによせ　げらへる　きよらや（ゲラヘキヨラ杜に国寄せ《建物の名》を作ることの美しさよ）〈二〇の一六〉

③ 強意の係助詞「ど」、「か」などを受けて文を終止させています。

④ 助動詞「やに」（ように）が付きます。

○さくらが　さくやに　きみし　しなて　なよら（桜が咲くように君《神女》がしなって踊るであろう）〈一四の八〉

⑤ 助詞「ぎやめ」（まで）、「す」（もの）が付きます。

(6) 準連体形

活用語尾の「る」が脱落した形にあたります。チェンバレンは「apocopated form」（下略形と訳されている）と称し、仲宗根政善氏は「準連体形」と称しておられます。『おもろさうし』では、動詞の「ある」、補助動詞の「よる」（「居る」の変化した形）、助動詞の「たる」にしか使われていません。

① 接続助詞「もの（もん）」（原因）、「こと」（偶然条件）が付く時のみ使われています。（助動詞「たる」のときは準体助詞「す」が付く時にも使われている。）なお、次の「きよもん」「きよ物」は「来る」の連用形＋「よる」の準連体形＋接続助詞の「もの」の変化したものです。

○なみ　いぢへ　との　みちへ　きよもん（波の中に出て行って、御殿を見て来ているので）〈五の四一〉

(7) 已然形

① 係助詞「す」を受けて文の結びの語となります。

② 接続助詞「ば」（順接確定条件）、「ども」（逆接条件）が付きます。

(8) 命令形

① 命令の言い方で文を終止します。助詞「や」や「い」が付くときもあります。

○まへにかち　よて　こう（前に寄って来い）〈一一の一六〉

【形容詞】

本土の形容詞に単独で対応する形を「形容詞基本形」と言い、本土の「形容詞語幹＋さ」に対応する形を「形容詞サ融合形」と言うことにします。『おもろさうし』では、ク活用とシク活用の二種類があります。[注12]

形容詞基本形

① 未然形の用例は見当りません。

② 連用形は、本土方言と同じであり、頻繁に用いられています。

○はり　ひろく　おりあげて（幅を広く折り上げて）〈五の五〉

○いけいけしく　はやせ（生け生けしく盛り上げよ）〈一一の三八〉

ウ音便は「良く」にのみ生じています。「よ」や「ゆ」と表記されています。

○あが　なさが　ゆ　はり　あまやかせ（吾が父が良く走らせて喜ばれよ）〈一三の一七二〉

③　終止形は、ク活用の例は見当りませんが、シク活用の例は次のようなものがあります。

○くに　いけいけし（国が生き生きしている）〈一一の九四〉

しかし、ごく稀です。

④　連体形は「よかる」だけがあります。

○よかる　ひに（良い日に）〈一の一九他〉

⑤　已然形や命令形の用例は見当りません。「形容詞連用形＋有れ・ちよわれ」の形で表現されています。

○まちよく　あれ（真強くあれ）〈一三の一四八〉

○世　ながく　ちよわれ（世永くましませ）〈五の三四〉

⑥　ク活用、シク活用ともに語幹の独立性が強く、「きもちやおや（肝痛親。すなわち心から愛している親）」、「なだかこしらい（名高いコシライ）」、「うるわしはな（麗しい花）」、「おだしきよ（隠し子）」等のように、直接体言を修飾した例が多くみられます。用言の連体形を修飾し複合した例もあります。

形容詞語幹とサの結合

『おもろさうし』ではすでに「形容詞語幹＋さ」の用法がよく発達しています。ク活用形容詞に対応する語は「とうさ（遠さ）」「なおさ（直さ）」「こまさ（細かさ）」等のように、音変化は生じていません。シク活用に対応する語は、「めつらしや（珍しさ）」「かなしや（愛しさ）」「かはしや（香ばしさ）」等のように、語尾のシサがシシャになり、さらにシャと音変化しています。この形には次のような用法があります。

①　述語となって文を終止します。この形による終止法が、終止形によるそれをほぼ駆逐しています。

○すざべ大さとが　かぢ　とたる　こまさよ（兄部である大里が舟の舵をとった細さよ）〈一三の五〉

②　「有り」と一緒になって、助動詞に続いたり、係助詞に呼応して文を終止したり、命令文を作ったりするなどの機能を果たしています。なお、今日の方言では「形容詞語幹＋サ」と「有り」が融合していますが、『おもろさうし』では融合していません。

○わかさ　あし　ときや（若かった時は）〈七の三六〉

③　サ変動詞「する」が後続して「…がる」、「…のように振舞っている」という意味を表わしています。

○いみきもりぢよ　いちよなしや　しゆるな（酒盛りで忙しくしているか）〈五の五四〉

④ 稀ではありますが、さらに「の」が付いた形で、連体修飾語となります。

○かなしやの　ゑけり（愛しい兄弟）〈一四の一二〉

【代名詞】

第一人称代名詞では「あ・あん」「わ・わん」などがあります。

○あんは　かみ　てづら（私は神を祈りましょう）〈二の四五〉

「あが」は「おとちや（兄弟）」「おなりかみ（姉妹御神）」のような人・神を修飾する傾向があるのに対して、「わが」は「うら（浦）」「おやくに（親国）」のような土地・社会を修飾する傾向があります。

第二人称代名詞では「おが」の「お」があります。『おもろさうし』では、目上にも目下にも使われています。不定人代名詞では、「た」「たる」があります。「づれ」が助詞「が」に続く場合は人代名詞のようです。

○づれが　さちへ　にせる（誰が差して、似つかわしいか）〈一一の三九〉

指示代名詞では「こ」「これ」「おれ（それ）」「あれ」「なお・なおう（何）」「づれ（どれ）」などがあります。

【助動詞】

未然形に接続する助動詞

① 「す」は使役・尊敬の意味を表わしています。尊敬の意味を表わした例はまれです。サ行四段動詞と同じ活用をし、接続形は音変化して、「ちへ」となり、助動詞の部分と助詞の部分を分析することは不可能になっています。（動詞を含めた全体を使役動詞としたほうが、適当でしょう）

○よなおし　なか　もらちへ　あんじおそいに　みおやせ（世直しの杯を盛らして、君主様に奉れ）〈一四の五八〉

② 「る」は、受身・尊敬・可能の意味を表わしています。「れ・る・れれ」と活用しています。

○のちまさりあんじに　おもわれれ（ノチマサリ按司に思われなさい）〈一四の六一〉

③ 「ず」は打消の意味を表わしています。しかし、美称辞として固定化した例のみです。

○あかずめつらしや（飽かず愛らしい人。神女名）〈一三の一〉

④ 「ぬ」は、打消の意味を表わしています。「な・に・ん・ぬ・ね」と活用しています。文末にきた「に」は助詞とみなすことも可能でしょう。

○おれづむ　またな　いな　ぢやはな　さちやる（ウリヅン《春》を待たずにもう大きな花が咲いた）〈一三の二三八〉

⑤「まし」は、願望の意味を表わしています。終止形のみ使われていて、仮想の意味を表わした例は見あたりません。

○みちへ　いぢへ　いき　ぬばまし（見て行って息を伸ばしたい）〈一一の二〉

⑥「ん」は、推量・意志の意味を表わしています。「ん・め」と活用しています。

○いみやは　せめて　うたん（今は攻めて討とう）〈二一の四〉

連用形に接続する助動詞

①「たる」は完了や状態の意味を表わしています。「た（ちや）・たら・たる（ちやる）・たれ（ちやれ）」と活用しています。前に来る動詞によって音便化します。変わり方は動詞の接続形と同じです。

○みしゆ　もたちやこと（中略）みしゆ　もちにげて（御衣を持たしたので…御衣を持ち逃げて）〈一二の七八〉

②「つる」は強意の意味を表わしています。「有る」「居る」に接続した「あつる」「よつる」の例しか見当たりません。

○中ぐすく　あつる　うらとよむ　つづみ（中城に有る浦々に鳴りとよむ鼓）〈二の一一〉

③「き」は過去の意味を表わしています。連体形の「し」の例が一例あるのみです。

○わかさ　あし　ときや　よろい　ゑらで　きちやもの（若い時は鎧を選んで着たので）〈七の三六〉

④「ぼしや（ぶしや）」は願望の意味を表わしています。語源は「欲しさ」で、用法は形容詞に準じます。さらに「動詞の連用形＋ぼしや」が「する」にかかって、「…したがる」の意味を表わしています。

○わかいきよが　みふしや（ワカイキヨ《人名》が見たい）〈二一の五〉

○つづみごへ　きゝぼしや　しよわちへ（鼓の音を聞きたがりなさって）〈一七の三一〉

終止形に接続する助動詞

①「まじ」は、打消意志や打消推量の意味を表わしています。終止形の「よせるまじ」の一種六例のみです。

○とももすへ　せいいくさ　よせるまじ（千年の後まで軍勢を寄せないだろう）〈一三の一八〉

活用語の連体形、名詞、あるいは、助詞「の」に接続する助動詞

①「やに」は比況の意味を表わしています。語源は「やう（様）」に断定の助動詞連用形の「に」が付いたものです。固定化していて連用形しかありません。

○いしかねのやに　をのち　つきよわれ（石金のように御命が付きなさいませ）〈八の六四〉

②「やる」は断定の意味を表わしています。「やら」、「やれ」、「や」と活用しています。
○しつらいす　ことなおしかみやれ（シツライ《神女名》こそ事直し神である）〈一六の二二〉
③「さらめ」は、断定推量の意味を表わしています。語源は、係助詞「す」と断定の助動詞「やら」と推量の助動詞の已然形「め」の融合したものです。
○かくわよ　まぶる　かみさらめ（角の魚はきっと守る神であろう）〈一三の一四八〉
④「なる」は存在の意味を表わしています。連体形の一例のみです。
○しよりくになる　あんし（首里国にいる按司）〈一〇の一七〉

【助　詞】

格助詞

①「が」は、主格・連体修飾格・好悪の対象を表わしています。人代名詞、王・神・大君などの語、四季・天候などの語にもっぱら接続します。ただし、上・中・下・内・前などの語、「命」「みもん」に続いて行く場合には普通の名詞にも接続します。
○ちやなおもいが　まちより（謝名様が待っている）〈一四の一五〉
○わかいきよか　みふしや（若殿を見たい）〈二一の五〉

また、動詞の連用形に接続し、動作の目的・累増を表わしています。
○おわもりや　くめ　みきや　おわちへ（オワモリ《神女名》は久米島を見にいらっしゃって）〈一三の二一八〉
○ちばなこしたけに　あらへか　あらへ（知花後岳で洗いに洗い）〈一四の二三〉
②「の」は、主格・連体修飾格・同格・好悪の対象などを表わしています。指示代名詞、数詞、一般名詞、形容詞語幹などに接続します。
○しろちやねの　よりなびく　きよらや（白種子のゆれなびくさまが美しい）〈一五の五二〉
○きみの　ふみあがり（高級神女であるフミアガリ《神女名》）〈六の四五〉
③「な」は、連体修飾の働きをします。一例のみ見られます。
○くにな　つち（国の頂）〈一四の四四〉
④「に」は、場所・時・動作の対象・受身の対象を表わしています。
○しよりのみやに　なよら（首里の祭場で踊ろう）〈一二の四五〉
○ぬしに　まぶられて　おぎもせぢ　まされ（神女に守られて、心の霊力よ、勝れ）〈七の一〉
また、動詞の連用形に接続し、動作の目的を表わしています。
○かはら　かいに　のぼて（曲玉を買いに登って）〈一〇の二八〉
⑤「おて」は、動作する場所を表わしています。動詞接続形「居て」から現在の助詞（-uti）

に変化する途中のようです。

○いぢへなおて　みれは　みやきぜんは　御さけど　もりよる（伊是名で見ると今帰仁ではお酒をもっている）〈一七の四二〉

⑥「かちへ」「かち」は、方向を表わしています。名詞あるいは格助詞の「か」や「に」に接続します。

○まへにかち　よてこう（前に寄って来い）〈一一の一六〉

⑦「と（ちよ）」は、動作の共同者を表わしています。

○きこゑ大きみちよ　てたてるかはと　とこゑ　やりかわちへ（聞得大君と太陽とが御声をやりかわして）〈七の一八〉

⑧「てて」は、引用を表わしています。

○おやみぶさ　きよりてて　しられれ（オヤミブサ《船のこと》が来つつあると申し上げよ）〈一三の一四一〉

⑨「から」は、起点・出発点・強意・原因を表わしています。体言、あるいは、用言の接続形に接続します。

○けよかから　しばしば　みらに（今日からしばしば見よう）〈二の二〇〉

⑩「より」は、起点・比較を表わしています。

○さてみなとより　おゑ（佐手港より追え）〈七の三七〉

○おま人　たまより　まさり（御真人は玉より勝っている）〈八の三〉

準体助詞

①「す」は、「〜するもの・こと」の意を表わし、体言の資格を与える働きをしています。『おもろさうし』の場合は、独立性があり、形式名詞とする方が適当かも知れません。動詞や助動詞「ん」には連体形に接続しますが、助動詞「たる（ちやる）」には準連体形に接続します。

○おみきやうよ　おがむすが　まさり（御顔を拝むものが勝り）〈七の四五〉

接続助詞

①「ば」は、未然形に接続して仮定条件を表わす用法と、已然形に接続して確定条件を表わす用法とがあります。

○はゑ　こわば　はゑ　なれ（南風を乞えば南風になれ）〈一三の一八三〉

○たまみしやく　さしゆわれば　もゝぢやらは　みちへど　うらやみよる（玉の御杓を差していらっしゃるので、多くの按司は見て羨んでいる）〈一五の二二〉

②「こと」は、準連体形に接続して、ある事態の起きる機会（偶然条件）や原因・理由を表わしています。「〜したら、〜したので」の意です。「事」が語源です。

○たま　もたちや事　みしゆ　もたちやこと／たま　もちにげて　みしゆ　もちにげて（玉を

持たしたら、御衣をもたしたら、衣を持ち逃げて、御衣を持ち逃げて〈……のし八〉

③「もの（もん）」は準連体形に接続して、やや主観的な原因・理由を表わしています。「～したので」の意です。「物」が語源です。

○ただ　ひとり　やたもの　おもいはの　きもちやさ（ただ一人で遣ったので思えば気の毒である）〈一四の一六〉

④「て（ちへ）」は連用形に接続して、動作の継起などを表わしています。前の語と融合同化していることなどもあって、一般に「接続形」と呼ばれています。（動詞の接続形の項の参照）

⑤「ども」は、已然形に接続して、逆接の確定条件を表わしています。

○みれども　あかん　しよりおやくに（見ても飽きない首里親国）〈三の三八〉

⑥「なげな」は連用形に接続して、動作の並行を表わしています。「～しながら」の意です。『おもろさうし』には二例しかありません。

○こなげなげな　よて　きより（上下させながら寄って来つつある）〈一四の七〇〉

⑦「の」は、語や文節を結びつける働きをします。動詞の連体形や已然形に接続します。もとは格助詞の「の」であり、「さいわたるの、さくら」では、まだ連体修飾格を表わす働きをもっていますが、「おかめはの、よがあけるやに」では、もはや格を表わしているとは言いがたいでしょう。したがって、接続助詞とするのが穏当と思われます。

○さいわたるの　さくら　しげ〳〵と　おりさちへ…（咲きわたる桜をしげしげと折って差して…）〈一〇の二一〉

○あんしはゑや　おみかうの　おかめはの　よがあけるやに（按司様は御顔を拝めば夜が明けるようである）〈七の四一〉

係助詞

①「す（しゆ）」は、強意を表わしています。「す」は直前にiが来ると口蓋化して、「しよ・しゆ」となります。「何がどうする・どんなだ」の型の文では、文末を已然形で結びます。

○なお　みちへか　なよる　きみ　みちへす　なよれ（何を見て踊るか。神女を見てこそ踊る）〈一三の二一九〉

②「ど」は、強意を表わしています。「ど」は直前にiが来ると口蓋化して、「ぢよ」となります。また、「る」と音変化することもあります。「何がどうする・どんなだ」の型の文では、文末を連体形で結びます。

○かぐらの　けおのうちる　かに　ある（天上の聖域はこのようである）〈二〇の五五〉

③「だもす」は、強意を表わしています。「だも」と「す」の複合したもので、文末を已然形で結んでいます。

○げすだもす　かに　あれ（下司でもこのようである）〈七の四六〉

④「ちよも（ちよむ）」は、「～であればこそ。～でも」の意を表わしています。

○のろやちよも　やぐめさ（ノロ《神女》でも恐れ多い）

⑤「か」は、疑問を表わしています。直前にi母音がくると口蓋化して、「きゃ」となります。多くは疑問詞のある文中で用い、文末は連体形で結びます。

○のう　みちへか　おひきよる（何を見て追って来ているか）〈一二の八〇〉

⑥「も（む）」は、添加を表わしています。体言や助詞「から・ぎやめ」に接続します。

○けよも　あちやも　おみきやうよ　おがむすが　まさり（今日も明日も拝む人が勝り）〈七の四五〉

⑦「は（わ・や）」は、ある物事をとりたてて、他と区別することを表わしています。

○けよは　わかとのうち　あちやは　こめすかちへ（今日は若殿内へ、明日は米須《地名》へ）〈一四の一四〉

⑧「い」は、強意を表わしています。文末は已然形で結ばれています。〈一の五〉の一例のみ。[注13]

○かたな　うちい　ぢやくに　とよみよわれ（刀を打ち佩いて国中にとよみたまう）〈一の五〉

副助詞

①「でん」は、極端なものの例示を表わしています。

○しまでん　くにでん　みおやせ（島でも国でも奉れ）〈一一の八〇〉

②「がめ（ぎやめ）」は、到達点・限界を表わしています。体言、あるいは、動詞の未然形・連体形に接続します。「ぎやめも」「ぎやめや」という複合の形もあります。野原三義氏によると、『おもろさうし』では「ぎやめ」系が一〇三例、「ぎやで」系が五例、「まで」が一例用いられています（「〈まで〉について」）。[注13]

○おぼつぎやめ　とよて（オボツ《天上の神の在所》まで鳴り響いて）〈一の三五〉

③「ぎやで」は、到達点・限界を表わしています。体言、あるいは動詞の未然形に接続します。

○しまよの　あらぎやで（島・世の有るであろうかぎり《ましませ》）〈五の六八〉

④「まで」は、到達点を表わしています。体言に接続します。『おもろさうし』では「〜から〜まで」の形で一例使われているだけです。まだ移入語という感じが強いです。

○ともから　ほいまで（船のともからへさきまで）〈一二の四七〉

間投助詞

①「よ（よう・ゆ）」は、詠嘆・呼び掛けを表わしています。文末にも用いられて終助詞のような面もあります。

○はひやよ　どけてて（「ハヒヤ《人名》よ、どけ」と言って）〈九の一七〉

②「や」は、詠嘆・疑問を表わしています。終助詞の用法もあります。

○げにや　へらいぼしや（げにこそ付き合いたい）〈一九の四八〉

③「い」は、語勢を整えたり、感動を高めたり、詠嘆を表わしたりします。[注14]

○おとだるい　きもからと　しひ　つく（オトタル《人名》は心から霊力がつく）〈一四の一一〉

終助詞

①「な」は動詞の終止形に接続し、禁止を表わしています。

○あか　なさいきよ　なげくな（我が父よ、嘆くな）〈一二の五九〉

また、動詞の終止形や助動詞「たる・ちやる」の準連体形に接続し、疑問を表わしています。

○いみきもりぢよ　いちよなしや　しゆるな（酒盛りで忙しくしているか）〈五の五四〉

また、動詞の終止形や助動詞「に」に接続して、詠嘆を表わしています。

○こが　きよらさ　こが　みほしや　あよるな（こんなにも美しい。こんなにも見たくあるよ）〈一四の一〉

また、未然形に接続し、願望を表わしています。

○あだにやの　あやより　くせより　みらな（安谷屋《地名》の綾踊り、奇しき踊りを見たい）〈一四の五〇〉

②「だな」は動詞の未然形に接続し、願望を表わしています。

○あかなさと　みこゑ　あわさだな（我が父と御声合わせたい）〈一四の三〇〉

③「に」は未然形に接続し、打消疑問（「〜しないか」の意）や打消反語（「〜しないか、いやきっと〜する」の意）や願望を表わしています。常に文末に来ます。

○大きみに　まはへ　こうて　はりやに（大君に真南風を願ってきっと走らせよう）〈一三の五〉

○あんしおそいよ　はやさに（王様を囃そう）〈一一の三八〉

④「が（ぎや）」は体言・動詞接続形・「に」などに接続し、疑問を表わしています。現在は濁音「が」ですが、『おもろさうし』時代は、清音「か」であるのか、濁音「が」であるのか、不明です。

○ぢやなもひや　たがなちやる　くわか（謝名様は誰が生んだ子か）〈一四の一〉

⑤「や」は、詠嘆・軽い疑問を表わしています。動詞の未然形・命令形、あるいは「に」などに接続します。

○やまといくさ　よせらや（大和の軍勢が寄せて来るだろうよ）〈二〇の三四〉

⑥「い」は、軽い疑問を表わしています。動詞の未然形に接続します。

○けよわ　のが　しよらい（今日は何をしているだろうか）〈五の五四〉

⑦「しよ（しゆ）」は、推量・意志を表わしています。動詞の未然形に接続します。

○いつか　なつ　たたしよ（何時夏になるのだろうか）〈七の三四〉

⑧「ど（る）」は、強意を表わしています。体言、あるいは動詞終止形（一例のみ）に接続しま

す。

○せだかこは　だに　ま　御み事る（セダカコ《神女名》は真に立派である）〈一一の二八〉

(三)　語　彙

外来語

「かくご（格護）」「かほう（果報）」「げす（下司）」「け・けい（気）」「くねんぼ（九年母…蜜柑の一種）」「ごんげん（権現）」「ざしき（座敷）」「さに（算）」「しよ（主）」「すぢや（衆生）」「せ・せい（精）」「ぜに（銭）」「せん（千）」「せんどう・せど（船頭）」「たう（唐）」「たきや（大海）」「ぢい（地）」「ちてに（地天）」「ぢやうす（上手）」「てに（天）」「てにち（天地）」「との（殿）」「なばん（南蛮）」「なむぢや（南鐐…銀のこと）」「はつ（初）」「ひやくさ（百歳）」「ひやし（拍子）」「ぼうさ（菩薩）」「ほとけ（仏）」「まん（万）」「みやうぶ（屏風）」「みしやく（御杓）」など多数の漢語（和製漢語も含む）が入っています。これらはほとんどすべて本土経由の語です。

造語法・語構成

① 擬声語に、接尾辞「めく」が付いて動詞を作ります。

○さらめく（さらさらと風が吹く）

② 形容詞の語幹に「がる」が付いて動詞を作る例があります。

○めづらがる（「愛する」の意）

③ 形容詞の語幹が名詞に付いて尊敬の意を表わす接尾敬称辞となる例があります。

○天がなし（天の尊称）

④ 動詞の連用形＋「きよら」で、「〜して美しい」という意の複合語を作ります。

○なりきよら（鳴って美しい。鼓の美称）

⑤ 「思い」が「よもい」「もい」と音変化して、接尾敬称辞となっています。

○ひやりよもい（ヒヤリ様）

⑥ 尊敬の接尾敬称辞に「にしや」「にせ」「し」「しゆ」「はゑ」「まへ」「御まへ」があります。

○てたがまへ（太陽の御方、王のこと）　○あめくし（天久の御方）

⑦ 名詞に接尾語「や」が付いて「…するもの」という意を表わしたり、親しみを表わしたりします。

○あらむぎや（新麦）　○はぎや（接ぎや。船大工）

⑧ 指小の接尾辞「がま」が存在しています。

○やふそころがま（屋富祖《地名》の男）　○はねうちがま（羽撃ち《船名》）

三　『おもろさうし』以後の言語

『おもろさうし』以後の主な言語資料としては、次のようなものがあります。

『仲里旧記』（一七〇三年頃）は、首里王府が旧記座（役所名）を設け、各間切（行政区画、現行の村にほぼあたる）、各島の番所に、その地方の城・嶽・祭式・物事の由来などを報告させた。これは仲里間切から報告したものである。神女の名やクェーナ（祭式歌謡の一種）・オタカベ（祝詞の一種）・マジナイ（呪詞の一種）などが主に平仮名で書かれています。[注15] 同様のものに『具志川旧記』『渡嘉敷間切由来記』などがあります。

『女官御双紙』（一七〇九年頃）は、王府の女官の名称、職掌、祭祀の次第などが記載されています。その内、ウムイ（祭式歌謡の一種）・クェーナなどが主に平仮名で書かれています。同様のものに『君南風由来并位階且公事』『聞得大君加那志様御新下日記』などがあります。

『混効験集』（一七一一年）は、琉球王府が編集した琉球方言の辞書で、古老の言葉やオモロの言葉を平仮名で表記し、意味によって配列してあります。副題に「内裏言葉」とあるように、他の資料の言語に比べて、「お」「む」「おむ」などの接頭辞がひじょうに多く使われているし、「むしやもち」（「接頭辞み＋さ文字」の変化形。肴のこと）のように本土の女房言葉の移入されたものもあります。[注16]

『琉球国由来記』（一七一三年）は、『仲里旧記』のような各間切の報告書をもとに、琉球王府旧記寄奉行の向維屏（仲里按司朝英）、顕徳安（糸数親雲上恵秀）などが整理編集したものです。その中には、平仮名でオタカベやクェーナなどが表記されている部分もあります。[注17]

組踊は、一七一九年の尚敬王の冊封使歓待のために、玉城朝薫が創作したものですが、その脚本が「護佐丸敵討」「孝行之巻」「二童敵討」「執心鐘入」「銘苅子」です。それに続くようにして多くの組踊の脚本（例「手水の縁」「大川敵討」）が書かれています。写本の異同、歴史的仮名遣に近い表記法、文語と口語の相違などの問題点がありますが、量も多く、重要な言語資料となります。[注18]

『屋嘉比工工四』（一七七〇年頃）や、『琉歌百控』（一七九五～一八〇二年頃）は、八・八・八・六調の短歌です、口語ではありませんが、それなりの資料となります。[注19]

『英琉辞書』および『琉球語と日本語の文法の要綱』は、一八四六から五四年の間、沖縄に滞在したベッテルハイムの著わしたものです。[注20]

以下に述べることは、これら約一〇〇年あまりの隔たりがある資料により述べていることに注意して下さい。

『おもろさうし』以後の主な変化として、音韻では次のようなことが挙げられます。

① 共通語のエ段に対応する母音がiになり、オ段に対応する母音がuになり、「す」「ず」「つ」「づ」の母音uがiになりました。その結果、短い母音は三つになりました。琉球祖語以後、短い母音の数が少しづつ減少していることになります。

○ami（雨。『英琉辞書』）　○duru（泥。『英琉辞書』）
○matsi（松。『英琉辞書』）

② 連続した母音は融合同化するようになります。連母音auやaoがo:に、aiやaeがe:になりました。

○わない（私は。ワネー《ワネ》を表記している。「護佐丸敵討」）
○mẽ（前。『英琉辞書』）

③ 組踊の頃は、子音の後のi母音の影響により、軟口蓋破裂音が口蓋化（キ・ギがチ・ヂになる現象）するようになりました。『英琉辞書』の頃には、さらに、一部のケ・ゲがチ・ヂになることも生じました。

○ふじ（風儀。「護佐丸敵討」）　○djĩnũ（芸能。『英琉辞書』）

④「り」子音が脱落してiになりました。

○みすずひ（御硯。『混効験集』）　○ちぢよゐ（千鳥。『混効験集』）

⑤ kurがkkwに、gurがngwに音変化するようになりました。

○おまつくわ（御枕。『混効験集』）
○ゆまんぐい（夕間暮れ。[jumaNgwi]を表記したもの。『混効験集』）

⑥ 促音「ッ」が音素として確立しました。

○をつと（夫。『混効験集』）　○をつてい（一昨日。『混効験集』）

⑦『英琉辞書』の頃まで、「せ」の子音はまだsだったので、「し」の子音ʃ（ローマ字ではʂi）とは、区別されていました。（ちなみに、「せ」と「す」の区別はなくなっている。）

○si（岩〈干瀬〉。『英琉辞書』）　○shi（四。『英琉辞書』）

⑧『英琉辞書』の頃まで、「ね」の子音はまだ非口蓋化のnで、「に」の子音のʃ（ローマ字ではnʸ）とは、区別されていました。

○ni（根。『英琉辞書』）　○nyi（荷。『英琉辞書』）

文法では次のような変化が生じました。

① ハ行四段活用（特に二音節動詞において）がラ行四段活用するようになりました。

○諷らはん（諷おうとも。『琉歌百控』二二五）

② 下二段活用がラ行四段活用になりました。

○たえららぬ（絶えられない。「孝行之巻」）

③「連用形＋居り」は継続の意味を失い、普通の終止形はすべて「居り＋ん」が融合した形になりました。

○あゆん（有る。「孝行之巻」）

④ 持続態の「接続形＋居り」が融合同化しました。

○忘れとて（忘れていて。「執心鐘入」）
○うまれたうて（生まれていて。「護佐丸敵討」）

⑤ 結果態の「接続形＋有り」が融合同化しました。
○つくたいんばい（作ったワイ。「万歳敵討」）
○uchétang（置いてあった。『琉球語と日本語の文法の要綱』四三頁）
⑥「形容詞語幹＋サ＋有り」が融合同化しました。
○軽（が）つさり（軽い。「萬歳敵討」）
⑦ 一人称代名詞「あ」が使われなくなり、「わ」のみになりました。
⑧ 打消の助動詞「だな」「だ」、仮想の助動詞「まし」、推量の助動詞「ん」、状態の助動詞「つる」、過去の助動詞「き」、打消推量の助動詞「まじ」、比況の助動詞「やに」、存在の助動詞「なる」などが使われなくなりました。
⑨ 比況を表わすのに「ごと」が用いられるようになりました。
○露きやたごと（露に行きあったようだ。「孝行の巻」）
○似ちよるごと あもの（似ているようなので。「女物狂」）
⑩ 連体修飾を表わす助詞「な」、動作の目的を表わす助詞「に」、方向をあらわす「かち」引用を表わす助詞「てて」、比較を表わす助詞「より」、逆接を表わす助詞「ども」、強意を表わす助詞「す」「だもす」、極端なものの例示を表わす助詞「でん」、到達点などを表わす助詞「がめ」「ぎやで」、願望を表わす助詞「な」「たな」、詠嘆を表わす助詞「や」、意志などを表わす助詞「しゆ」などが使われなくなりました。

⑪ とりたての助詞「は」は、長音に付く場合を除き、前の語と融合同化するようになりました。
○tudjé（妻は。『英琉辞書』）
⑫ 方向を表わす「かへ（かい）」、引用を表わす助詞「んでぃ」、逆接を表わす助詞「ても」「すが（しが）」が新たに使われるようになりました。
○まかへ 往きゆが（どこへ行くか。「銘苅子」）
⑬ 尊敬の動詞・補助動詞の「おわる」「わる」「ちよわる」が使われなくなりました。
⑭ 接尾辞の「よもい」「もい」「にしや」「し」「がなし」「はゑ」が活性を失い、特殊な語に付いたものが固定化しています。
⑮「めしある（ミシェーン）」系の尊敬語が発達しました。
○お取立めしやいん（お取り立てなさる。「銘苅子」）
語彙では、次のような変化が生じました。
① 本土経由の漢語がますます増えました。また、中国から沖縄に直接移入された単語も使われ始めました。『混効験集』の「きいはのはな」（桂花）は、疑問も残りますが、その可能性が強く、そうだとすると早い時期のものとなります。一九世紀の資料になると、次のような確かな例が見られるようになります。
○pópó（包包。料理の名。『英琉辞書』）
○chi piang（桔餅。菓子の名。『英琉辞書』）

② 形容詞の語幹に「がる」が付いて動詞を作る用法がなくなりました。

③ 指小辞「がま」が使われなくなり、「ぐゎ」がよく用いられるようになりました。

○funigva（小舟。『英琉辞書』）　○ushigva（小牛。『英琉辞書』）

沖縄方言の音韻・文法上の特徴と言われていることの多くはこれらのことどもです。例外で顕著なものは、接続形の音便ですが、『おもろさうし』以後も大きいです。以上のことから沖縄方言らしさは、おおよそ『おもろさうし』以後に、生じたことだと言えそうです。

四　結　び

『おもろさうし』の言語は、沖縄方言らしさへの変化の段階にすでに入っています。『おもろさうし』の第一回の編集が一五三一年（第二尚氏第六代尚清王時代）に行なわれているのですから、一六世紀初期、第二尚氏第三代の尚真王の時代あたりから、徐々に変化が起き始めたと考えられます。比嘉春潮は「尚円の子尚真が、間切間切に城を構えていた按司たちの武装を解除し、首里に集居せしめ中央集権を強化してから、北は大島から南は八重山にいたる沖縄人の住む全地域にわたり、首里の統治力は浸透していって、ここに厳然たる琉球王国ができた。」と述べています。[注22] この環境が言語に大きく影響を与え、今日の沖縄方言らしさへの胎動を始めさせたと推測されます。

朝薫の書いた戯曲の言語は、『おもろさうし』の言語よりそうとう変化しています。しかし、まだ、古い用法を残していて、今日の沖縄方言とは違います。したがって、一八世紀初・中期、第一三代尚敬王や蔡温の時代から、二回目の大きな変化が起きたと考えられます。比嘉春潮は「一七世紀初め、中国貿易の利を狙う島津氏の侵略にあって、琉球王国は忽ちにしてその付庸国となってしまった。それから一世紀半、尚象賢や蔡温の如き敏腕な政治家によって、新情勢に適応する政策が立てられ、苦難の中にも国内統治の体制が次第に整えられ、社会は一応の安定をみるに至った」と述べています。[注23] 島津氏の侵略による旧秩序の崩壊と、その後の新秩序の立て直しは、言語文化に影響せずにはおきません。オモロの創作がほとんどがなくなり、ただ公の祭礼などで、わずかに古謡としてうたわれるだけになったのに対し、琉歌・組踊が盛んになっていったことがそれを象徴しています。

その後一〇〇年たった一九世紀中頃の『英琉辞書』などに書かれている方言は、『沖縄語辞典』[注24]に書かれている首里方言（士族男子の言語）とほぼ同じです。この頃には首里方言は成熟、確立していたと考えられます。なお、那覇方言（一般民衆の言語）などは、首里方言がさらに変化した形だと言えましょう。

以上、結章の部分は、十分に明きらかになっていませんが、試案のつもりで述べてみました。

［主な参考文献］

①上村幸雄他「琉球列島の方言」（『言語学大辞典』、一九九二年、三省堂）

②国立国語研究所『沖縄語辞典』（大蔵省出版局、一九六三年）

③仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』（角川書店、一九八三年）

④外間守善他編『沖縄古語大辞典』（角川書店、一九九五年）

⑤仲原善忠・外間守善編著『校本おもろさうし』（角川書店、一九六五年）。引用もこれによる。ただし、濁点を適宜付けた。

⑥仲原善忠『おもろさうし辞典・総索引』（角川書店、一九六七年）

（注1）服部四郎「沖縄方言の言語年代学的研究」（『民族学研究』第一九巻第二号、一九五五年）、および「琉球方言と本土方言」（『沖縄学の黎明』、一九七六年）

（注2）「邪馬台国はどこか」（『学士院紀要』第四二巻第二号、一九八七年）

（注3）伊波普猷「語音翻訳釈義――海東諸国記附載の古琉球語の研究――」（『金沢博士還暦記念東洋語学乃研究』、一九三三年。『伊波普猷全集』第四巻再録）参照。

（注4）塚田清策『琉球国碑文記の定本作成の研究』（学術書出版会、一九七〇年）参照。

（注5）原田禹雄訳注『陳侃使琉球録』（榕樹社、一九九五年）参照。

（注6）京都大学文学部国語国文学研究室編『纂輯日本訳語』（京都大学国文学会、一九六八年）、および大友信一・木村　晟『琉球館訳語本文と索引』（小林印刷出版、一九七九年）参照。

（注7）池宮正治「おもろさうし概説」（『解説おもろ御さうし』、一九八〇年）参照。

（注8）高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』（武蔵野書院、一九九一年）参照。

（注9）須山名保子氏は「標準語／o／に対応する母音が、せま母音化して／u／となり、標準語／u／に対応する母音との区別を失うのが、琉球列島諸方言に広くみられる音韻変化であるが、この音韻変化が、奄美方言では完成せず、特に奄美大島南北両方言において、少なからぬ単語で、／o／のままである」（「琉球列島の方言（奄美方言）」三省堂『言語学大辞典』所収）と述べている。

（注10）高橋俊三「沖縄方言の動詞音便形の変遷」（『沖縄文化』第三一巻一号、一九九六年）参照。

（注11）仲宗根政善「おもろの尊敬動詞『おわる』について」（『沖縄学の黎明』、一九七六年）参照。

（注12）外間守善「沖縄方言形容詞の史的変遷」（『現代言語学』、一九七〇年。後、『沖縄の言語史』に再録）参照。

（注13）野原三義「〈まで〉について」（『国際大学国文学』3一九七二年）参照。

（注14）外間守善「古代語助詞『い』の文法的性格」（『法政大学文学部紀要』第二二号、一九七七年）参照。

（注15）仲原善忠「校注『仲里旧記』」（『仲原善忠選集』下巻、一九六九年）参照。

（注16）外間守善『混効験集　校本と研究』（角川書店、一九七〇年）。引用もこれによる。池宮正治『琉球古語辞典　混効験集の研究』（第一書房、一九九五年）参照。

（注17）伊波普猷・東恩納寬惇・横山重『琉球史料叢書』（井上書房、一九六二年）の第一～二巻に掲載され

ている。

（注18）伊波普猷『琉球戯曲集』（春陽堂、一九二九年。『伊波普猷全集』第三巻に再録）参照。

（注19）外間守善・比嘉　実・仲程昌徳編『南島歌謡大成Ⅱ沖縄篇（下）』（角川書店、一九八〇年）参照。

（注20）自筆原稿が大英図書館に保存されているが、まだ出版はされていない。

（注21）喜名朝昭・伊波和正・森庸夫・高橋俊三共訳「ベッテルハイム著　琉球語と日本語の文法の要綱」(1)～(4)（『南島文化』第二～六号、一九八〇～一九八四年）参照。

（注22）比嘉春潮『新稿沖縄の歴史』（三一書房、一九七〇年）参照。

（注23）右に同じ。

（注24）主な参考文献の二。

琉球王国の通訳者

伊波和正

沖縄国際大学公開講座1
琉球王国の時代

発　行――一九九六年一二月二七日
編　集――沖縄国際大学公開講座委員会
発行者――嘉手苅千鶴子
発行所――沖縄国際大学公開講座委員会
〒九〇一－二二二
沖縄県宜野湾市字宜野湾二七六番地の二
電話〇九八－八九二－一一一一（代表）
印刷所――株式会社南西印刷
発売元――ボーダーインク
〒九〇二
沖縄県那覇市与儀二二六－三
電話〇九八－八三五－二七七七

ISBN4-938923-92-0　C0020　P1500E

●乱丁・落丁はお取替えいたします。

地域を映す
沖縄国際大学公開講座

沖縄国際大学公開講座　四六版・定価各1500円

1　琉球王国の時代　発売元・ボーダーインク
2　沖縄学を探訪 -環境問題と地域社会-　ボーダーインク
3　女性研究の展望と期待　那覇出版社（近日出版）
4　沖縄の基地問題　ボーダーインク（近日出版）

沖国大ブックレット　A5版・定価各500円

1　アメリカの大学と少数民族そして沖縄　那覇出版社
2　21世紀への私立大学への課題　ボーダーインク

沖縄国際大学公開講座委員会刊